

マナウス日本人学校における国際理解教育の実践

前マナウス日本人学校 校長

愛知県名古屋市立宝南小学校 校長 紙 屋 裕 安

キーワード：在外教育施設，マナウス，国際理解，現地理解，グローバルな人材

1. はじめに

(1) マナウス市の概要

＜位置＞ 南緯3度8分，西経60度1分，海拔21 m～50 mの平地及び丘陵地

＜面積＞ 11,648 km²（アマゾナス州全体の0.75%）

・ベレン … 1,307 km

・ブラジリア … 1,928 km

・リオデジャネイロ … 2,863 km

・サンパウロ … 2,737 km

＜住民＞ 165万人（2005年統計）

・先住民（インディオ）とラテン系
（ポルトガル系）との混血が80%以上

・日系人は約2,000人 短期駐在日本人は約200人

＜気候＞ 高温多湿の熱帯雨林気候

・年間平均気温27.4℃，年間降水量2,308 mm

・雨季（12月～5月）と乾季（6月～11月）

アマゾン川の水位は，雨季と乾季で約10 m以上の差がある

＜教育＞ ブラジルの教育は6歳から9年間の義務教育

・小学校1年生から落第制度有り

2005年度統計で，義務教育課程の12%が落第，11%が中途退学



アマゾン川

(2) マナウス日本人学校の概要

昭和58年に文部科学省より認可を受け，学校を開設した。開校当時の児童生徒数は，全日コース（日本からの駐在員子女）のみで約30名であった。しかし，平成17年から減少傾向となり，現在は全日コース12名，文化コース（現地日系人子女）15名となり，海外日本人学校の中では小規模な学校である。

本校は学校の裏手にアマゾン地域特有のジャングルが広がり，日本の学校教育カリキュラムに沿った学習を進める全日コースと，本校で日本語を中心に学びながら現地校にも通う文化コースの児童生徒がともに学習するという環境から，日常の学校生活の中に，国際（現地）理解教育の環境が整っているといえる。そのため，総合的な学習の時間や増加時間（小1・2年）として「現地理解」・「外国語活動」・「ポルトガル授業」を，学校行事に「外国語発表会」・「現地校交流」・「ボイダンス（運動会）」・「船上宿泊（体験学習）」・「現地団体との合同発表会（学習発表会）」・「企業見学（遠足）」などを組み入れ，国際（現地）理解教育を進めている。

2. マナウス日本人学校を取り巻く状況

(1) マナウス日本文化振興会

本校運営母体の支援企業は24社（2013年4月現在）となっている。そのうち本校に通う子女を有する企業は6社である。つまり，日本人学校に通う児童生徒がいなくてもかわらず，日本人学校への支援を惜しまないとい

う日系企業によって支えられている。

(2) 日系団体・学校（園）・移住者

マナウスには「西部アマゾン日伯協会」という、日本とブラジルの橋渡しや日系社会の相互親睦を図る活動を進める団体がある。日本人学校との関わりも深く、さまざまな活動において日本人学校に協力依頼がくる。また、当地は日本人移住者が多く定住しており、日本人学校への支援をいとわない方々が多く、様々な協力をいただいている。

その他に「愛（まなみ）幼稚園」、「日本語学校」、「ねむの木学園」、「ジョゼフィーナジメーロ校」、「風河火山」など多くの日系学校（園）や団体と交流を深めている。

3. マナウス日本人学校における国際（現地）理解教育の実際

(1) 教育課程に組み入れているもの

① 職業講話

中学部生徒を対象に、文化振興会理事、総領事館副領事を講師にお招きし、「職業講話」をしていただいた。理事からは、「社会、会社はプロの集団」と題し、社会の厳しさや専門性に対する誇り、これから生きていくための指針、さらに現地従業員の雇用と指導について講演を受けた。副領事からは、「日本と世界の架け橋—外務省の仕事」と題し、外務省の仕事、自分がその仕事に就いたきっかけ、グローバルな視点を養いつつも自分の事を考える時間が大切だという内容である。

② 現地理解授業

アマゾンの地域では、実に多くの植物を使った工芸品が作られている。そこで、アマゾンでよく見慣れたアサイー・ジュート・クイヤ・ココといった実を使い工芸品づくりに取り組んだ。講師として、現地に在住する方を招き、制作だけでなく、アマゾンの歴史や材料の由来と特性、さらに日本との関わりについても学習を深める。児童生徒は、コースター鉛筆立て、小物入れなどを制作することで、現地の人々の工夫や知恵を体感する。



現地の人とクイヤを加工

③ ポルトガル語授業

ポルトガル語授業では、これまでの書き取り中心から会話中心に授業内容を変更した。担当する現地採用教員は、日伯協会の日本語学校で講師を務める日系の方である。日本語能力が高く、企業での通訳の経験もあり、児童生徒が楽しく取り組めるよう丁寧で動きのある授業となった。その成果は、現地校との交流学习で現れ、これまでは挨拶程度であった会話が、自分たちで意思疎通に努めるようになった。

④ 全校道徳

年間1回、全校児童生徒を対象にして現地在住の方から講演をしていただく。

平成22年度…マナウスから40km離れたエフィジェニオ・サーレス移住地在住のエフィジェニオ・サーレス自治会長「佐藤五郎氏」からブラジルに移住してからの苦労や喜びについてお話しいただいた。

平成23年度…西部アマゾン日伯協会職員「鶴田俊美氏」からブラジルと日本の関係、ブラジル人に日本語を教えるときの苦労、多くのブラジル人と友だちになることの大切さなどについてお話しいただいた。

平成24年度…元アマゾナス日系商工会議所会頭「川田敏之氏」から『アマゾンにやってきた日本人たち』という内容で、農地開墾、食糧確保、野生猿による作物荒らし、マラリア病など現地特有の数々の困難を乗り越えながら当地に定住した経緯についてお話しいただいた。

(2) 学校行事として取り組んでいるもの

① 現地弁当を食べる日

本校は普段弁当を持参し昼食としている。しかし、現地理解の一環として、現地校と同じメニューを毎月1回、弁当で配達してもらうようにしている。メニューは3種（肉・鶏・ラザニア等）から選択し、量を加減し、おかわりで調節した。もちろん、フェイジョアアダ、ファリーニャといった現地特有の食べ物も用意されている。ご飯はいわゆる外国米であり、野菜は無農薬、衛生面での心配はあるのだが、多少のリスクは背負いながらの取り組みである。

② 現地校（ジョゼフィーナジメーロ校）交流

本校近隣に、キリスト系の私立学校がある。この学校は、カリキュラムの中に日本語の選択授業を取り入れている。ほとんどの児童生徒はブラジル人であるが、一部日系の児童生徒も含まれており、日本に対する興味関心の高い学校である。

第1回目…日本人学校での体育（水泳）、国語（書写）、図工などの授業体験

第2回目…ジョゼフィーナジメーロ校での科学作品展見学

第3回目…ジョゼフィーナジメーロ校でのレクリエーション交流

いずれの交流も、グループに分かれた児童生徒主体の交流であり、ポルトガル語を使い意思疎通を図るといふ取り組みである。

③ 運動会（ボイダンス発表）

通常の競技や応援合戦の他に、演技種目で現地に定着している「ボイダンス」を発表している。この踊りは、毎年6月にマナウス近郊のパリンチンスという町で、カプリシヨーズとガランチードという2チームに分かれて行われる踊りである。マナウスに住むブラジル人は、このために働いているという人もいるほどだ。児童生徒は現地衣装を身にまとい、元気に踊る。

④ 体験学習

アマゾン川プライヤにて、水遊びやレクリエーション行い、アマゾンの豊かな自然に触れる。宿泊は船上となり、ヘッジ（ハンモック）を各自で張り、船の明かり以外は全くなく、まさに暗闇の世界の中で眠る。

⑤ 外国語発表会

全日コースの児童生徒の発表で、小学部はポルトガル語、中学部は英語やポルトガル語にて劇や紙芝居・歌の発表をする。文化コース児童生徒は、発表の講評を行う。会話中心に指導している本校授業の成果を試す場ともなっている。

(3) 現地貢献として取り組んでいるもの

① 敬老慰安会

日伯協会主催の敬老慰安会に、本校児童生徒が出演し、大運動会で披露した「ボイダンス」をお年寄りの方に楽しんでいただく。お年寄りの方や日伯の担当の方に大変喜んでいただき、来年是非お願いしたいという声をいただいた。現地では約2000名ほどの日系の方が住んでいらっしゃる。そういった方々と直接関わることのできるこの機会は、現地の方と本校児童生徒が心の共有のできる貴重な体験となっている。

② お話大会

日伯協会主催の、日本語弁論大会である。優秀な児童生徒は日本への研修に派遣される。本校で学ぶ文化コース児童生徒は、主に日本語を学ぶことを目的として通い、将来日本語を生かした職業に就くことを目的としているため、この大会において常に最優秀賞に輝いている。また、日本人学校児童生徒の代表も友情出演をし、現地との交流を図っている。

③ 天皇誕生日祝賀会

現地では、毎年総領事館主催の「天皇誕生日祝賀会」が催される。ここでは、日本国歌、ブラジル国歌を歌

うのだが、毎年歌に元気がない。そこで、日本人学校児童生徒が普段から両国歌を歌っているため、当日の協力依頼があった。当日は、歌はもちろんのこと、児童生徒の待っている姿勢や態度に感銘を受け、日本の教育水準の高さを感じる現地ブラジル人の方が多く見られた。

4. 成果と今後の方向性

本校のこれまでの取り組みにより、現地企業や現地社会からの期待は高まり、深い絆ができてきた。同時に、児童生徒の国際理解教育を進めるにあたり、その土壌は育ちつつあるといえる。そこで、今後は現地との関わりを深めることで国際理解教育（現地理解）につなげていくと同時に、日本の文化のよさを発信することがよりいっそうグローバルな人材育成に通じると考える。異文化理解だけでなく、日本文化の発信が大切と考える。